

母校のTLO活動への協力



榎本 英俊 (稲門弁理士クラブ)

私が母校早稲田大学のTLOに関わるきっかけになったのは、大学の出願の代理人を引き受けるようになってからです。そして、数件の出願を代理するうちに、昨今、国が推し進めている産学連携の強化を図るために、早稲田大学知的財産センターの内部に入って協力願えないかと打診を受け、平成14年の5月から、週一回の非常勤職員として、早稲田大学TLOのサポートをすることになりました。

早稲田大学TLO

まず、早稲田大学TLOについて紹介いたします。

早稲田大学TLOは、1999年4月(平成11年)に大学等技術移転促進法に基づく技術移転機関として承認を受けた組織です。早稲田TLOの特徴としては、学内組織(早稲田大学知的財産センター)の一部であること、会費を徴収しない非会員制であること、シーズ(技術移転前の発明)の要旨を出願後直ちにホームページに公開すること、が大きな特徴となっています。

知的財産センターの組織としては、大別して、発明の発掘から権利化そして技術移転活動を行うTLO部門と、大学発ベンチャー企業の創立、育成を支援するインキュベーション部門とに分かれ、常勤、非常勤合わせて28名の所帯です。そのうち、弁理士は私一人で、私は、TLO部門の技術コーディネータとして活動しております。

特許出願は、現在、延べ、約200件位で、その分野別の内訳は、多い順に、電気・電子17%、バイオ16%、材料13%の順になっています。そのうち、権利化されたものはまだ数件しかなく、その中で、高密度記録を実現する磁性膜技術に関する特許に対する技術移転が、数億円規模のホームランとなったのは、報道等でご存知のことと思います。ただ、その

後は、大型技術移転が現在のところ出でおらず、第2の大型技術移転を目指して、画期的な発明の発掘、早期権利化、移転先探しに奔走しているところです。

従いまして、今後の課題としては、大型技術移転となりうる学内の研究を早期に発掘し、大学発ベンチャーを含めて、いかに高い確立で実用化する企業に売り込めるかどうかです。

前述したように、現在、ホームランとなる技術移転が少なく、ロイヤリティー収入も少ないことから、組織を運営する予算を国からの補助金等で賄っている状態で、早く、補助金からの依存体制を脱却する必要に迫られております。

私の仕事

私は、現在、週1回丸一日(10時~18時)早稲田大学に出勤して、発明者である教授、助手、学生等に対して特許相談をしたり、知財センターに上がってくる発明と先行技術とを簡単に対比して、出願適格があるかどうかを判断する仕事を主として行っております。週1回の勤務では、なかなか対応仕切れない面もありますが、現状、止むを得ないので、極力、同じことを他の常勤の人が行えるように、教育にも力を入れております。それも非常勤では、限度があるので、特に企業の知財部を経験した実務家をもっと内部に登用し、内部の体制を早く企業並みにする必要があると思っております。

現在、私が気になることは、まだまだ、数多くの大学発明が出願されずに眠っているのが現状で、このような発明をいかに発掘できるかが今後の鍵となります。ご存知のように、大学の先生方のうち、最近の産学連携の動きに敏感で、知財戦略に協力的な先生もいますが、いまだに、発明は自分の研究成果に関係ないと考え、大学の知財戦略に対して非常に

冷たい(?)先生も多いのが現状です。後者の先生については、自分の発明を学会に発表できれば、後は、大学の職務発明規定に反し、特許を受ける権利を勝手に無償で共同研究先の企業に譲渡しているケースがまだまだあるのではないかと考えています。このような先生に対しては、共同研究先の企業との関係で問題は残りますが、極力大学の権利として、当該共同研究先の企業に技術移転をする方向にもっていく必要があると考えております。大学の先生方に言わせれば、特許や発明のことで相談があっても、すぐに相談にのってもらえない等の不満もあるようで、これによって、大学に出願を依頼する意欲が一層失われているように感じております。

従いまして、今後は、各先生に対して、TLO ということについて一層の理解と協力を得るように啓蒙

活動をすることと、早稲田はマンモス大学であるため教員の数も莫大で大変な作業ですが、各先生方の研究動向を把握し、各先生の特許相談等をすぐに受けられるような体制にする必要があると考えており、このために、一肌脱がなければと考えております。

最後に

以上のように、早稲田大学知的財産センターは、設立からまだ3年位となる歴史の浅い組織であり、今後の舵取り次第で、国策でもあるTLOが成功するか否かを大きく左右すると思っております。このため、組織内の唯一の弁理士である私の役割も重要であり、日々の出願業務と同じに胃の痛い日々が続くことでしょう。